

2018.6.9(土) 第2回被災地視察研修(南三陸・石巻)

6月9日、防災教育未来づくり総合研究センター主催の第2回被災地視察研修(南三陸町・石巻市方面)が開催されました。学生12名と若手職員3名が参加して南三陸町・石巻市を訪問しました。予報では最高気温28度と報じられていましたが、南三陸町ではやませの影響でひんやりとした風が吹いていました。

未だかさ上げ工事中で、道は多くのトラックが行き交い、いたる所で重機の音が絶え間なく聞こえていました。

大きな角度をつけた防潮堤の真新しいコンクリートの壁は場所によって形状を変え、襲来する津波の威力を打ち消してくれるのだろうと想像されます。



かさ上げ工事が進む中、南三陸町の防災対策庁舎は、まるですり鉢の中にあるかのように、とても小さなものに見えました。

今歩いているこの地面の下に町があったと想像するのは、なかなか難しいことになっていました。戸倉小学校も「この辺にありました」と言うことしかできなくなっていました。

震災遺構を保存・維持すること、そして伝えることの難しさに、学生は気付いたようでした。

午後は大川小学校に向かいました。バスを降りた途端、線香のにおいに包まれ、亡くなった命をずっと見守っている人たちがいることがわかります。そよぐ風に揺れる枝や葉の音、鳥のさえずり、蛙の声が聞こえます。ここに間違いなく町があり、人の暮らしがあったのです。

亡くなった命を無駄にしないよう、生きている私たちは学び、同じ失敗を繰り返すことのないよう行動していくという使命を感じました。



東日本大震災では

- ・チリ津波を経験した人(経験で判断)
- ・海が見えない所に住んでいた人(海岸から少し離れている)
- ・避難したけれど戻った人

が大勢犠牲になった。語り部の伊藤さん(72歳)の言葉です。